

「平成 16 年度大学生の基礎学力の維持方策
（プレースメントテスト及びリメディアル教育の実践的研修）」

場所：北海道情報大学

期間：平成 16 年 9 月 6 日～平成 16 年 9 月 10 日

1. 研修の内容

最近の大学生の学力低下に頭を悩ませている大学は少なくない。

本研修では、最近の大学を取り巻く状況、世界における e-learning の現状の紹介や、日本において先行している英語教育の e-learning の現状報告がなされ、さらに、大学でリメディアル教育を実施する際の、プレースメントテストの実施方法、クラス分けへの利用方法やリメディアル教材の開発状況、教授方法、評価方法など、具体的な方法が紹介された実践的研修であった。

9 月 8 日（水）「現在の大学の状況」

- (1) 入試の多様化と学力低下問題
- (2) 教員の FD、求められる教育力とは
- (3) 「英語で講義」のための研修
- (4) 大学における e-learning の現状

9 月 9 日（木）「客観的な学力評価方法」

- (1) 全国基礎学力の調査
- (2) プレースメントテストの開発と実施
 - 1. 問題冊子とマークシートによるテスト
 - 2. コンピュータテスト

9 月 9 日（木）「大学生の基礎学力の保持 英語」

- (1) 大学生の英語力と教育
- (2) 補助教材 & e-learning 教材
 - 学内の学習体制の整備及び学習プログラム
 - 大学生の基礎学力の保持 数学

9 月 10 日（金）「大学生の基礎学力の保持 日本語」

- (1) 大学生の日本語力と教育
- (2) 補助教材と実践的指導法
 - 1. アカデミックリーディング
 - 2. アカデミックライティング
 - 3. アクティビティ

全体協議・各大学の状況報告

2. 研修の成果

9月8日(水)は、北海道道南を大型台風が直撃し、道内の交通は全線運休となった。千歳空港まではたどりついたものの、6時間の足止めを食い、残念ながらこの日は止む無く欠席した。

9月9日(木)、前日の参加者が台風の影響で10名前後だったため、研修内容が多少変更され、8日の内容を盛り込んでいただいた。

結論から述べると、大変充実した研修であったと思う。

まず、全体として、他大学における事例が、実施者によって紹介された点がよかった。

教育コースのデザインは、実際にやってみて初めて評価ができるものである。特に、学生にどう受け入れられるかは、学生の特性に左右される。同じ教材を同じやり方で実施しても、言うなれば「学生次第」で、単に学力だけでなく、文系・理系によっても反応が異なる。いくつかの事例を複合して紹介された点で、本学に合う形の教育方法、教育内容を探ることができたと思う。講師が研究者であると同時に実践家であったことが大変に有意義であった。

自分は留学生の日本語を担当している点から、特に、「大学生の日本語力と教育」に興味を持っていた。NIME 小野博教授の講義からは、「NIME 日本語語彙テスト調査」の新しいデータを紹介いただいた。それによれば、5年前と比較しても大学生の日本語力は明らかに低下しており、現在中学生レベルの語彙力しかない大学生がどの大学にもいるそうだ。その日本語力低下の背景として、

- ・本を読まなくなった
- ・携帯メールより長い文章を書く機会が減った
- ・少子化、入試の多様化で入試競争が緩和された

の点が挙げられ、「何のために勉強するのか」の再認識が必要であることが言われた。

また、「日本語力をあげる」とは、

- ・学習スキルを身につける
- ・自ら考える力を養成する
- ・問題解決能力を育成する

ことであり、たとえば、レポート作成などに特化した「具体的な目標」がある教育が、能力を短期で育成しやすく、学生の「書けない」コンプレックスに有効であると報告された。これは、NIMEの実験授業で得た「出席率もよく受講生に支持された」「指導教員もレポートが読みやすくなったと評価した」などの結果からである。

さらに、NIMEで開発中の「日本語リメディアル教材」の紹介があった。

教材の特徴は、学部などの環境から必要とされる日本語が多様であることをふまえた「多様な領域で、組み合わせ選択できるタイプ」であること、また、「言語教育を専門としない教員が使い、添削など授業時間外の負担が大きくない」ことである。

現在、無料で提供することも可能だが、必ず使用してFBをつけることが条件である。将来的には、大修館から発売する予定である。(参加者にはメールで連絡が来る。)

3. 授業への研修成果の反映状況

NIME教材は、現在自分の担当している授業で使用できる可能性が薄く、FBが出せないことを考慮し、申し込みはしていない。しかし、入門ゼミなどにおいては役立つ部分もあるのではないだろうか。

直接、授業への反映ではないが、本学の留学生リメディアル教育のあり方について、いろいろと考えることができた。

現在、本学の留学生の日本語力には、入学時において、すでに相当の差がある。原因として、まず、入試の多様化があげられる。すでに、入学直後の段階でプレースメントテストを実施しており、リメディアル教育の必要な学生をピックアップすることは現状でも可能であるが、次に、そうした学生にどのように教育を行っていくかが問題である。担当教員が個別に指導するのには限界がある。

千葉商科大学酒井氏の発表でも、e-learningは「できない学習者」に有効だとされた。それは、以下の3点の特徴からである。

- 1.十分に理解できる段階から始められる
- 2.自分のペースで学習を進められる
- 3.学習の進み具合を確認できる

いち早く e-learning システムを確立することが肝要だと思われる。現代中国学部では、すでに中国語 CALL 教材を開発していると聞く。そのノウハウは、留学生の日本語教育にも応用できるに違いない。

立命館大学では、形成評価を採用している。期末試験は行わずに、HP で学生に常に現時点での評価を公開している。それによって、学生は毎週のアチーブメントが確認でき、学習意欲の維持につながる。また、教員は、問題の早期発見、早期治療に役立てることができるそうである。e-learning システムは、すぐ簡単に導入できるものでもないが、立命館の事例は、授業における形成評価の重要性を再考させられた。早速、小テスト結果などを逐次集計し、ドロップアウト予備軍の学生に、評価の数値として提示することによって、個別に注意を促すようにしたいと思う。

学生のコンピュータ・リテラシーの問題、端末や LAN の問題など、e-learning システムの導入は、全学的に取り組むことが難しいプロジェクトかもしれないが、留学生教育で小規模に先行させるのは、留学生だけでなく、全学生にとって意義があるのではないだろうか。

以上

学部長	FD委員長	FD委員会	総合企画課長	係